

9条は日本の宝！吹田のつどい 「戦争の怖さを知る財界人の直言」

1924年神戸市生まれ。東京大学法学部卒。現在、経済同友会終身幹事、国際開発センター会長。日本興亜損保(旧日本火災)社長・会長を経て、91年から相談役。各地の「9条の会」などで積極的に講演活動を続ける。



戦争を人間の目で見た平和憲法 経済も人間の目で見る必要が

さる2月7日、吹田メイシアターで「9条は日本の宝！吹田のつどい09実行委員会」が、経済同友会終身幹事の品川正治さんを招いて「戦争の本物の怖さを知る財界人の直言」と題する講演会を開催した。会場には約600名の市民が参加し、立ち見も出るほどの盛況。反戦平和の草根運動が、市民の中に広がりつつあることを示した。

京都三高に三好達治(詩人)さんが こられて「君たちを死なせて…」と号泣

品川さんは自身の戦争体験から語りだした。「私の85年の人生は2つに分かれています。最初の22年は大日本帝国憲法の下、天皇の赤子として。後の60数年は現在の日本国憲法の下で主権者の一人として。小学校入学の年に満州事変が起こり、中学校入学時には日中戦争が起こりました。そして高校に入ったときはすでに太平洋戦争が始まっていたのです」品川さんは神戸生まれ、高校は京都三高(現・京都大学)。叔父が千里山に住んで

ツクリして先生をなだめて職員室までお連れしました。そんなことが「当時の学校の風景」でした。

「彼を助けることができなかった」 講演中、参加者が激しく泣き出した…

高校2年生の秋、召集令状が届く。中国の延安市に近い最前線。中国共産党軍と明けても暮れても戦闘の毎日。「白兵戦、敵と向き合って撃ち合う戦闘も経験しました。迫撃砲が飛んできて数時間意識を失ったことも。負傷しても野戦病院もない。とにかく隊から離れたら死が待っています」長い間戦争体験を語ることはできなかった。心の中にトラウマがあつたからだ。「激しい戦闘の中で、10数メートルしか離れていない戦友が『やられた！助けてくれ』と叫ぶ。とっさに彼を



品川さんの著書の数々

助けようと壕の中から出て行こうとしました。でも別の戦友が私の足をつかんで離さない。彼は黙って首をふるだけ。あの時穴から出

て行けば私は殺されていたでしょう。しかし『なぜあの時、彼を助けることができなかつたんだ』という思いがずっと残っていたのです」戦友たちがたくさん住む島根県で講演。講演中、「助

終戦の翌年、武装解除。「戦争放棄」の 9条を読み、涙が止まらず…

「終戦の翌年、5月に復員しました。私たち中国にいた前線部隊は8月15日に戦争が終わったわけではない。重慶政府(国民党)蒋介石政府の命令の下、中国共産党軍との戦闘に狩り出されたのです。11月に武装解除、ようやく5月に鳥取県の港まで。停

泊中、船内によれよれの新聞が。3月7日付で『日本国憲法草案が発表された』と書いてあります。「品川！読め」と隊長が命令する。私は憲法第1条天皇から読み始め、9条まで読み進みました。「日本国民は…(中略)…。陸海空軍その他の戦



武器使用 制約多く 海自派遣 新法後回し

戦争を起すのも人間 それを止めることも人間

「いいですか、戦争を起すのも人間、それを止めることもできるのも人間です。戦争は地震や洪水ではない。戦争を起こそうとする人がいるから起さるんです。『お前はどちらなのか?』という声が聞こえます。どちらの立場に立つのか?それが私の座標軸なのです」広島・長崎の原爆、沖縄戦、東京・大阪大空襲…。殺されていったのは罪なき女性と子どもたち。そんな悲惨な経験から、憲法が生まれた。「日本国憲法は、戦争を国家の目で見ていません。人間の目で見ています。だから戦争をしない」という9条が生まれた。私は戦争だけでなく経済も人間の目で見る必要があると思います」今は、アメリカの金融資本の目で見えた経済だ。昨年「年越し派遣村」ができて、働く人々が「人間使い捨て」

の経済に対して異議を申し立てた。イラク戦争の破綻、リーマンブラザーズの破綻など、アメリカにただ追従するのは間違いではないか、という世論が広がっている。「日本とアメリカは違うんだ、とすることが必要です。世界で原爆を落としたのはアメリカ。落とされたのは日本。アメリカ流のカジノ経済で庶民は苦しみ、労働者の中で『蟹工船』が読まれる。日本社会が変わりつつあると実感しています。政治家や行政に頼む時代ではない。国民が決めていく時代がやってきました。今年には総選挙があります。憲法も国民投票で是非が決まる。「人間の目で見て」戦争を平和に変える、経済も金融IIカジノ経済を、モノ作りII福祉経済に変える、ことが必要なのです」(文責・編集部)

講演の前には「火垂るの墓」の朗読劇が上演された

